日本遺産「月の都・千曲」シリーズ（第8回）

日本遺産「月の都・千曲」と千曲商工会議所

市民の皆様あけましておめでとうございます。

一昨年の6月19日に、私達千曲市（旧更級郡）にある姨捨棚田を中心に「日本遺産」に認定されました。千曲商工会議所は、それを記念し、昨年5月の新年度から「日本遺産・千曲」として機関紙「清流」においてシリーズで取り上げてまいりました。

今回、市民全戸配布という事で「更級」に見識があり、関する活動や著書のある、前共同通信社記者、大谷善邦氏に依頼し、表題の如くの特別寄稿を頂きました。

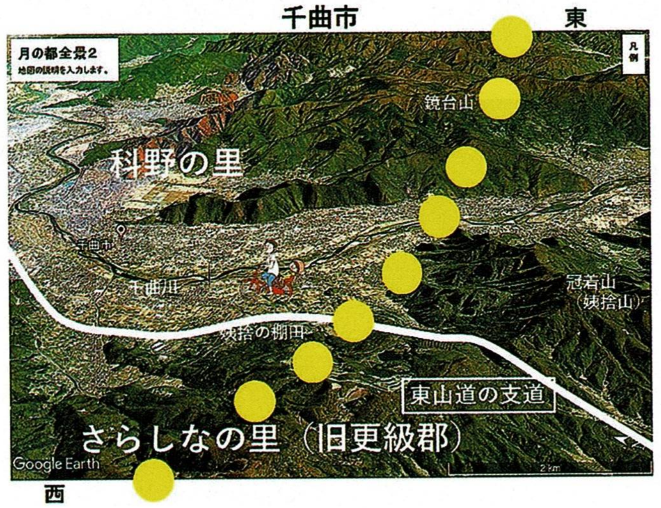
千曲商工会議所はこれからも、美しき故郷、「月の都・千曲」として市民の皆様と共に誇りをもって、地域の発展のために活動してまいります。何分よろしくお願い申し上げます。

広報委員　馬場　條（千曲市日本遺産推進協議会監事）

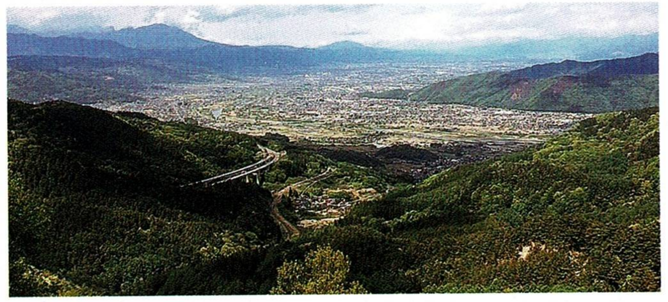
「月の都」の始まり、これから　日本遺産認定２年

さらしな堂代表、さらしなルネサンス会長　大谷　善邦

千曲市が「月の都」として日本遺産に認定され今年の6月で2年になります。「月の名所」は全国各地にありますが、「月の都」を自他ともに認めるところはなかなかありません。「芸術の都パリ」という言葉があるように、都というのはその分野の中心的なまちのことで、奥行きのある大きな空間のことです。ですから「月の都」は、「月が特別に美しいまち」ということになります。「月の都」は、「田毎の月」や「姨捨の棚田」にとどまらない奥深い地域の魅力をいう言葉です。どうして「月が特別に美しいまち」とみなされるようなったのか。それは都人たちが通る道が冠着山の西北の峠を越えてあったことが大きな理由だと思います。千曲川、鏡台山など月を美しく見せる舞台装置は、この峠などを行き来する人たちが標高の高いところから眺めることによって発見され、さらにその舞台のある「さらしな」という地名を詠んだ「わが心慰めかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て」の歌が、「月の都」と自称しても文句を言われない理由になったと考えていいのではと思っています。



昔から道は人間や物だけでなく情報を運んできました。今も上信越道と中央道という2本の高速道路が走るように千曲市一帯には、時代を通して国にとって重要な道が走っていました。千年以上前の奈良、平安時代も同じで、現在の中央道のルート沿いに、当時の国道である「東山道（とうさんどう）の支道」が通っていました。東山道とは、朝廷が都と現在の長野県を含む東日本一帯をつなぐためにつくった国道のことで、長野県には岐阜県の中津川市から阿智村の神坂（みさか）峠を越えて入り、飯田、伊那と北上し、松本北部で軽井沢の方に向かい、群馬県に抜けていきました。松本北部では、枝の道が北に走り、日本海側の地域とつながっており、その道が冠着山の西北の峠（古峠）を越えていました。東山道の本道から枝分かれした道なので「東山道の支道」と呼ばれます。いま鉄道が通っている冠着トンネルと高速道路が走る一本松トンネルの上あたりです。



都と日本海をつなぐこの道は、朝廷にとっても、まだ十分に支配下にならない東の地域を治めるうえで大変重要な道で、この道を通って都の役人など知識層の人たちが行き来していました。峠越えは旅をするときの大事なポイントで、来し方行く末などを眺め、考えたはずです。古峠に立ったときは、目の前にあるさらしなの里（千曲市）や千曲川が目に入ってきたはずです。月が夜空にあることもあったでしょう。峠を越えるときや峠に上っていくときには冠着山が見えます。

こうした光景を見た人たちがそれぞれに感想を抱き、情報を交換するなどしてさらしなの里の月の美しさは都で話題になり、全国に広がっていったと考えられます。

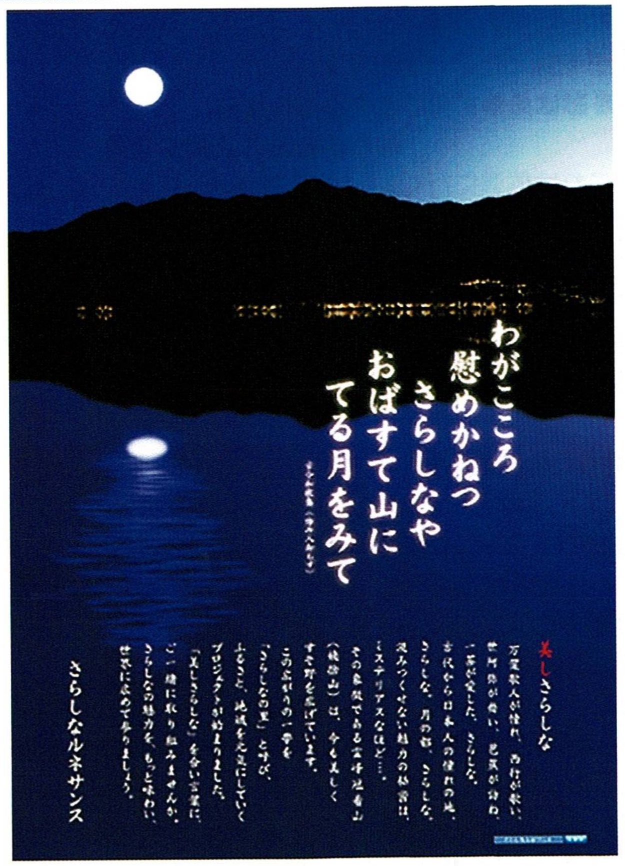
●歌から始まった「月の都」

その広がりに重要な役割を果たしたのが、10世紀初め、天皇の命令で編まれた古今和歌集に載る**「わが心慰めかねつさらしな姨捨山にてる月を見て」**の歌です。姨捨山は冠着山のこと。さらしなの里の姨捨山の夜空にある美しい月を見ていても、わたしの心はどうにも慰めることはできない、という意味です。この歌は、約50年後の950年ごろには、現在の私たちが知る姨捨説話の起源となる大和物語を誕生させ、室町時代には世界文化遺産になっている能の物語の謡曲「姨捨」を世阿弥をして作らせました。江戸時代には松尾芭蕉が月を見るためだけにさらしなの里に来て**「俤（おもかげ）や姨（おば）ひとりなく月の友」**の俳句を詠みました。

歴史に名を遺した人たちをどうしてそんなに魅了したのか。その理由を知るうえで押さえておきたいのは、むかしから人間が共通して抱える永遠の悲しみや苦しみは、老いや死だということです。老いや死の悲しみや苦しみからは、簡単には逃れることができません。いや逃れることができないと言い切っていいと思います。そのことを57577の短歌のリズムに載せて、だれでも唱えることができる美しい調べにしたのがこの歌です。歌というのは声に出して唱えるもので、歌謡曲やポップスなど悲しいときや苦しいときに口ずさんでいる歌があるでしょう。それと同じで、むかしの人は「わが心慰めかねつ」のこの歌を唱えながら、慰めきれない老いや死について思いをめぐらせてきました。

この歌の表現で、特に人々が魅力的に感じたひとつが「慰めかねつ」という表現です。いまでも「〇〇しかねる」というように使います。「しかねる」というのは、どうしても事情や理由があってできないということで、「できない」というより身の悶え感があります。美しいことで有名なさらしなの里の姨捨山にてる月を見れば、悲しみや苦しみは慰められるのではと思うかもしれませんが、「それほど美しい月を見ても慰めきれない」と歌ったところに、この歌の力があります。

悲しいときや苦しいときにうたう歌も、歌っているときは慰められても、歌い終われば、また…ということはないでしょうか。本当に切実な悲しみや苦しみはそんなに簡単にないものにはできません。でも歌っているときはなにか慰められているような感じがします。そういう人間の切実な心の真実をこの歌はうたっています。



もう一つ、この歌が美しい理由は、すがすがしくて躍動感のある「さらしな」という地名の響きと、老いや死と直結するおどろおどろしく悲しい響きの「姨捨」という言葉の対立と統合です。きもちわるいけどかわいいという感じを「きもかわいい」ということがあります。反対のイメージの言葉をうまく組み合わせると、人間はおもしろさや美しさを感じます。

こうした理由から、人間が抱える共通の悲しみや苦しみを表現するのにふさわしい場所はさらしなの里だ、とみなされるようになったと考えらます。さらしなルネサンスのポスターはこうしたイメージをもとにデザインしました。

●紀貫之も知っていたさらしなの月

この歌はだれが詠んだのかわかりません。ただ、どういう経緯でできたのかは推測できます。歌は古今和歌集の成立前にはできていたはずなので、詠まれたのは9世紀の800年代、朝廷が東北地方の蝦夷らを支配下に治める「東国経営」によってさらしなの情報が都に伝わったことが背景にあると考えられます。その情報を伝える役割を果たしたのが冒頭に紹介した「東山道の支道」と考えられます。

この歌はどこかに書きつけられていたのでしょう。古今和歌集編者の紀貫之（土佐日記の作者）は編集方針としてまえがきに、「万葉集に載っていない歌を集めた」と書いています。「わが心慰めかねつ」の歌は、紀貫之にと

っても触発力があったらしく、彼にもさらしなの月の特別感を詠んだ歌があります。

月影はあかず見るともさらしなの
山のふもとに長居すな君

これは信濃に行く人に紀貫之が贈った歌で、さらしなの美しい月にまどわされて居ついてしまうことのないようにと詠んでいます。「わが心慰めかねつ」の歌を思い起こさせる紀貫之のこの歌によって、さらしなの里の月の美しさはいっそう都人のあこがれの対象になっていった可能性があります。

●さらしなの地名力

以上、月の都となるときに重要な役割を果たした「東山道の支道」と「わが心慰めかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て」の歌のことを紹介しました。こうした歴史の厚みの上にわたしたちは今、「月の都」を語っています。日本遺産の大きな目的である観光振興に「月の都」をどう生かすかは、なかなか難しいですが、千曲市が「月の都」として日本遺産になるうえで、大きな働きをしたのが、「さらしな」という地名だったことをあらためておさえておきたいと思います。さらしなの地名の力を私が最初に意識したのは、中学の授業で平安時代の日記文学に更級日記があると知ったときです。私の出た更級小学校（現千曲市更級地区、旧更級村）と名前が同じであることにびっくりしました。

地元のことが更級日記に書かれているのか実際に読みました。まったく出てきません。がっかりしたけれど、研究者の間では冠着山（別名姨捨山）のある更級郡をイメージし、題名にしたのは定説。日記にはまったく出てこないのに、「更級」というタイトルを付けたのは、逆にすごいことではないかと気づきました。「更級といえばだれもがあの信濃の国の更級だとわかるはず」という思いが、千年前の都の日記作者にあったことになるからです。

日本遺産は文化庁の事業なので、地域にある文化財を物語で編集、構成するというところに特徴があります。立ち寄れる文化財（もしくは文化財に相当）であることが必要なのはわかりますが、「月の都」に構成された29の文化財の大半は、かつて更級郡（さらしなの里）だったところなので、さらしなの里にあることを強調すれば、もっと文化財は魅力的なものになるはずです。さらしなは「地名遺産」です。目には見えないけれど、後世にずっと残していく価値のある地名です。

「千曲市がなぜ月の都なのか」というテーマで、千曲市内の小中学校に出前授業を行っています。そのときは必ず、さらしなの里に「月の都」とみなされる歴史文化があったことを紹介しています。「月の都」の理由が子どもたちに伝わると思うからです。

おおたに・よしくに

1961年、冠着山の麓に生まれる。生地は旧更級郡更級村の入り口にあたる。2004年、大岡村が長野市と合併し更級郡が消滅したのが残念で、フリーペーパー「更級への旅」を創刊。さらしな堂のHPでさらしなの地名力を多様な角度から紹介している。2014年には「美しさらしな　月の都・千年文化再発見の里づくり」をスローガンに住民グループ「さらしなルネサンス」を結成。

2021年、勤めていた通信社を定年退職。生地は平安時代の日記文学「更級日記」題名の地であることから、新聞記者として培った編集力をもとに、この日記の作者のように伝えたい思いがある人の思いを文章にするのをお手伝いする、作文支援業を営む。著書に「地名遺産さらしな」「白　さらしな発日本美意識考」「さらしなのうた」など。

千曲市日本遺産推進室（月の都 千曲に寄せて）

新年あけましておめでとうございます。「清流」新年特別号の発行に寄せて、千曲商工会議所の企画により、さらしなルネサンスの大谷会長さんの特別寄稿を拝読いたしました。「わが心慰めかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て」の歌や、さらしなの地に東山道の支道が通っていたという歴史的背景を基にした大変分かりやすい明解なご説明に、古の都人が東山道の支道を通り峠越えした際、ここ「さらしな」の夜空の美しい月を見た情景が思い浮かびました。

日本遺産に認定された「月の都　千曲」のストーリーは、平安時代から現代に至るまで千数百年の長い歴史の積み重ねが文化庁から認定されたもので、市といたしましても、古来から伝わるさらしなの地名を大切にしながら、すべては歌から始まっている日本遺産「月の都千曲」を活用し、今後も千曲商工会議所とともに観光振興や地域活性化に努めてまいります。

「月の都 千曲」シンボルマークについて

月の都千曲

デザインコンセプトは、「地形と水がつくる千曲の月」で、千曲市の独自性や歴史的背景を継承し、市民の心につながりと誇りを感じられる。形は千曲市を囲む「山々の稜線」と、月の風景に必要な千曲川や棚田の「水」、そして月白（げっぱく）（月の光を思わせる青みがかった白色）で表現された「月」を組み合わせた。

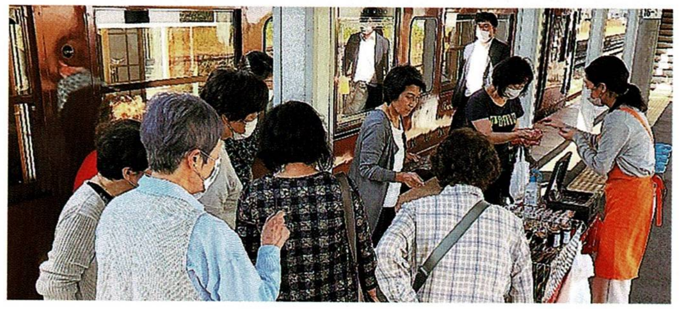
屋代駅ウェルカムステーション活動報告

屋代駅ウェルカムステーションでは、10月4日、11月22日に屋代駅のホームにて「観光列車ろくもん」に乗車されている方向けの特別販売を行いました。

千曲市といえば「あんず」ということで、あんずどら焼きやジャム、シロップ漬けなどをご紹介しました。14分間という短い停車時間でしたが多くのお客様にお買い求めいただき、千曲市とあんず製品をPRできたかと思います。

電車の出発時に手を振ってお見送りをすると、皆さんにも笑顔で手を振り返していただき、心温まるふれあいのひと時となりました。

旅をするお客様が少しでも楽しい気分になっていただけたら幸いです。



青年部の活動報告

秋の部員親睦ゴルフコンペ

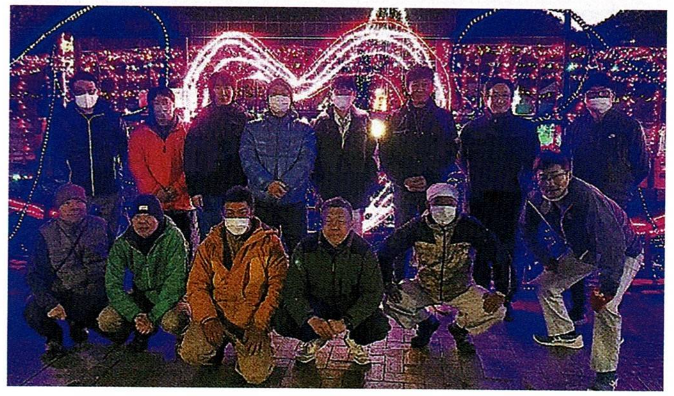
11月14日（日）、千曲高原カントリークラブにて開催しました。5組18名が参加し、少し肌寒い秋晴れの空の下、気持ちよくプレーを楽しみました。

ゴルフは、「新型コロナウイルス感染防止ガイドライン」改定（第6版）におきましても、健康維持のための運動の1つとされております。感染防止対策を十分とった上で、ゴルフを通して親睦を深めることができました。

優　勝：岩崎　龍太（有）イワサキ酒店）
準優勝：大塚　綾香（Shelly）
ベストグロス賞：尾崎　映彦（オザキテック）

イルミネーション事業

11月27日（土）・28日（日）、科野の里ふれあい公園に、2年ぶりとなるイルミネーション装飾を行いました（昨年はコロナ禍のため中止）。

毎回、部員がアイディアを出し合って、事前の備品点検や製作作業を行い、様々な装飾を施します。今回も「がんばろう!千曲」をテーマに、訪れた皆様の気持ちを色鮮やかな電飾で暖め、明るく楽しい気持ちで日々の生活やクリスマス、新年を迎えていただきたいという願いを込めて装飾しました。ぜひお出かけください。

場　　所：科野の里ふれあい公園（千曲市大字屋代130-1）
点灯期間：令和3年11月28日（日）～令和4年1月29日（土）
点灯時間：17時～22時